

身近なまちの風景物語(20)

いつしか変化

駅前を歩いて、アレっ？ しばらくして、同じ道でアレっ？、と思う。何かが変わっている。いつ変わったのだろう。

どうも前よりは何かが良くなっているなどは感じる。ただ何が変わったのか、にわかには思い出せない。

以前は駅前に多くの放置自転車があった。歩くのに邪魔だし、誘導ブロックの上にはみ出すように置かれているのを目にすると、嘆かわしい思いがした。風が強い日にはなぎ倒され、将棋倒し状態だ。

そこにある日、プランターが置かれ、花苗が植えられた。自転車が花に置き換わった。放置自転車対策と環境創出を兼ねた取り組みだ。

花が枯れているなどと思うと、しばらくして花が植え替えられた。

足下にあって目に触れにくいからか、関心が向けられないからか、管理者がまめに見に来ないからか、必ずしも手入れが十分とはいえなかった。

ただこうした姿を見かねた人たちが、確かにいた。

そこにある日、プランターに替わって木製の植栽ボックスが置かれ、草花が植えられていた。視線が上がった。歩いても、自転車でも、必ず目に入る。

そして心なしか、小まめに手入れがされているような気がする。

コンクリートと金属とアスファルトの中に自然の素材と植物があると、通る人たちの目を和ませてくれる。

加えてもう一つ。植栽ボックスの並びに、同じ木製の椅子と物置台も置かれた。

特にここは大通りの交差点である。高齢者や荷物の多い人たちにとって、信号待ちには好都合である。思いやりとおもてなしの姿勢が形になって現れている。

通る人たちへの気遣いが少しずつ風景を変えていく。いつの間にか、かつての放置自転車天国の残映も遠くに消え去っていく。椅子に座ると、また違った風景が目映る。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群4年）